

四 結 論

終りに當つて此の講演で得た主な結論を概括しておかう。第一に、佛教古代派の作品について語る時には、幸にして中印度で発見された、幾許かの石彫の斷片をいふに過ぎないので、之等が、此の種美術存在の論據となる唯一の證憑なのである。

第二に、何れの佛教美術研究者も、古代彫刻家が、嘗て佛陀の姿を現はさず、其の説話を示す工夫をしてゐる事を確めて、最初から全く意外とする所であつて、若し此の事實が、作家自身の彫り留めた銘文で立證せられなかつたなら、之を立證する事も不可能であつたと思ふ。

第三に、此の不思議な不自然の點について、その理由を佛教美術の歴史前、或は云はゞ其の胎生中に求めて、始めて之を了解し得る。而して出来るだけ過去に溯つて見て、この美術初頭の製作品は、紀元前五世紀の巡拜者に賣つてゐた小記念品であつたと考へるに至つたので、之は、世尊の降誕、成道、初